

豪州石油ガス資源開発会社 AWE Limited の公開買付けについて
テレフォンカンファレンス 質疑応答

1. 日時： 2018年5月18日（金） 17:00～17:50
2. 当社説明者： 執行役員 エネルギー第一本部長 大久保 雅治
Mitsui E&P Australia Pty Ltd (MEPAU)
Director & General Manager 東川 賢介
IR 部長 真野 雄司
3. 質疑応答：
- 質問 1
- AWE 業績インパクトについて、5月100%子会社化することだが、2019年3月期への織込み方、並びに Waitsia が 2020年に生産開始し、通年で寄与した場合の収益規模感について教えて欲しい。
 - E&P 事業全体で、持分権益生産量の中長期的に目指す規模感につき具体的な目標値のイメージがあれば、また原油とガスの構成比について教えて欲しい。
- 回答 1
- 2019年3月期事業計画にも一定の前提で収益を織込み済み。東豪州の Bass Gas や Casino Gas といったガス田のアセットからの収益貢献はあるが、Waitsia で FEED 実行中であり開発検討費用を鑑みると概ねトントンという見通し。これから改めて Waitsia の開発計画を練る為、将来の収益貢献について申し上げられるほど精度の高いものはない。
 - 生産量としての確固たる目標値はない。環境変化にも対応出来るサステイナブルな収益をあげられる事業ポートフォリオを構築することが目標。
- 質問 2
- Waitsia の生産開始の前と後で収益性がどう変わるか。東豪州と西豪州でマーケットのガス価格でどういう違いがあるか、また Waitsia は陸上ガス田である為コスト競争力があると考えていいか教えて欲しい。
 - オペレーター機能を獲得することによる将来的な波及効果につき、具体的にご説明願いたい。
- 回答 2
- 東豪州ガスマーケットは、2015年頃に LNG 輸出案件が3件立ち上がったことから、国内供給用のガスが不足して国家問題となっており、特に東豪州南部のガスマーケットの需給が逼迫、以来マーケット価格も右肩上がりに推移した。2017年に連邦政府が必要に応じて輸出規制を行うといった方針を示したこともあり、現状一旦踊り場となっているが需給状況が大きく変わるものではない。今後も売り手としては良好なマーケット環境と思っており、AWE を通じて Bass Gas、Casino Gas のアセットを積み増すのは意義がある。
- 他方、西豪州では複数の LNG プロジェクトが立ち上がっているが、LNG 輸出の 15% 相当のガスを国内に回すよう義務付けていることから、現在は需給はバランスしている。一方、国内向けに供給している既存ガス田の減退等が見込まれており、需給は今後引き締まる見込み。また、Waitsia は陸上ガス田であること、並びに需要地に近く既存の幹線パイプラインからも至近という好立地であり、コスト競争力は高い。

ガス販売は、東豪州には一部 Spot 取引もあるが、基本的には3年～15年の長期相対契約。よって、マーケット価格に関しては一概に言えないが、先にご説明の需給により、東豪州に比べて西豪州の方が現状では一般的に安い。

- オペレーターシップ獲得で、最も大きい効果は、事業のドライバーズシートに座ることにより、従業員の意識が高まること。これまではオペレーターへのインフルエンスを主眼としていたが、オペレーターシップをもつことで、自分達が主体となって事業を推進するという意識の変化が起き、且つ従業員のモチベーションにも繋がる。この意識を他のE&P事業体にも波及させ、各事業体のプレゼンスがあがっていくことで、ビジネスへの取り組み方も変わるし、人材の獲得や活用にも好影響が期待できる。

- 質問3
- 現在の探鉱活動等を通じてその周辺鉱区でどのような埋蔵量ポテンシャルが期待されているかについて教えて貰いたい。
 - オペレーターとして先ず Waitsia の開発があり、その後 Waitsia 周辺、豪州・ニュージーランドへと展開するとのお話だが、AWE の手持ち案件の中に既発見・未開発の案件があるのか、今後探していくのか、オペレーターシップのステップアップのイメージを教えてください。

- 回答3
- Waitsia 自体は元々ターゲットとしていた地層とは別の地層で発見されたもの。本発見を踏まえ、Perth Basin の有望性が見直され注目されている。既に Waitsia の隣接鉱区に複数のガス埋蔵量ポテンシャルが特定されており、当社は同 Area 近隣鉱区探鉱等を通じた価値最大化を今後検討する。
 - Waitsia 開発後、第2号の案件として具体的にお伝えできるものがあるわけではない。オペレーターシップ獲得による、従業員の意識改革・モチベーション向上に加え、アカウントビリティと危機管理能力の向上も重要視。地域によって事業環境・ルールが異なるところもあり、まずは、AWE が能力・知見を備えている豪州及びニュージーランドでの展開を考えている。今回の AWE 取得で、世界中であらゆるオペレーターシップを直ちに務められるとは思っていない。豪州及びニュージーランドでの広がりを確認した上で、他地域への展開可能性を見極めていく。

- 質問4
- 今回の公開買付けが何度か延長された背景について教えてください。
 - 完全に子会社することで、経営権・人事権が三井物産に移ると理解しているが、権限移行の状況について教えてください。

- 回答4
- 最初に中国企業が買収提案を表明し、次に地元の Mineral Resources、当社が3社目であった。AWE の株主の皆様は、4社目、5社目も出て来るのではと暫く様子見をしていた。豪州では2-3度の延長は一般的であり、滑り出しは既存株主からの承諾が低調だったため、何度か延長し、臨機応変に対応した。
 - PMI が適切に進むかとの質問と理解。既に PMI プランニングを開始しており、現地に主管部長を派遣し、AWE の従業員に買収経緯や背景を説明した。AWE と当社は過去様々な事業で一緒にやってきているので、旧知の人もおり、従業員の反応は非常にポジティブだった。新たに取得した AWE 資産には人材も含まれる。両者の強みを相乗効果的に発揮することが PMI であり、全てを三井物産流にやるわけではない。

また、当社は子会社の三井石油開発が保有する Siam MOECO Limited の小規模陸上油田でオペレーターとして操業してきた経験もあり。また、MEP 系の事業会社では現地採用の技術系の人員もいて、その中には既にオペレーター会社での経験を持つ人間も多い。従い、ピースバイピースでは既に連結グループの中でオペレーターシップの能力を保有していた。今回 AWE 買収により、実際オペレーションをやる場合のフルセットでの能力・ファンクションを確保できた。AWE の社員はパース約 40 名、シドニー約 20 名。その内、技術系の人間は約 30 人。AWE 買収前の当社連結グループ全体で技術系の人間は約 100 名。

以 上